

南半球便り（その 53）：全豪オープンテニス

1 月 24 日

先週メルボルンに出張した機会に、初めて全豪オープンテニスを観戦する機会に恵まれました。今日はそのご報告です。



メインコートであるロッド・レーバー・アリーナ（出典：ビクトリア州政府 HP）

1. ワクチン騒動

日本でも大きな話題になったようですが、ジョコビッチ選手のビザ取り消し、強制退去問題は豪州でも連日紙面を大きく賑わせました。

「そもそもなぜビザを出したのか？」「豪州テニス協会、ビクトリア州政府の対応と連邦政府（国境管理当局）との連携が十分にとれていなかったのではないか。」といった批判も聞こえてきますが、今回の処分には70%に上る豪州世論の支持が寄せられています。

「大選手だからといって特別扱いは許されない。」「ルールはルール。」（モリソン首相）、
「コロナ禍で豪州人は皆犠牲を払ってきたのだから、協力して今の状態を守る必要があ

る。」との議論には説得力があります。



モリソン豪首相のツイッター投稿

2. 頑張れ、大坂なおみ

そんな背景もあったので、今回の大会では、ワクチン接種してメルボルン入りしたディフェンディング・チャンピオンたる大坂なおみへの応援に力が入りました。



大坂選手の試合会場にて島田総領事夫妻と

21 日の三回戦は、ビクトリア州政府の駐日代表のアダム・カニーンさんの配慮で島田順二在メルボルン総領事夫妻と招かれ、貴重な観戦・応援の機会を得ました。

米国の新鋭アマンダ・アニシモバ選手との試合は、手に汗握る熱戦に。一時は大坂選手がマッチポイントを握って追い込んだのですが、その後タイ・ブレークにもつれこみ、まさかの敗戦を喫してしまいました。

3. 力と声援

それにつけても、間近で見て改めて感銘を受けました。鍛え抜かれた頑健な肉体。そこから繰り出される豪快なサーブとショットの数々。絶え間ない鍛錬を感じさせる、まさに力と力のぶつかり合いでした。学生時代に軟派なテニスをかじっていた私としては、火の出るようなラリーの応酬に圧倒され続けました。

もう一つ強く印象に残ったのは、会場の声援です。試合中、「頑張れなおみ (Come on, Naomi.)」との声援を豪州のテニスファンから何度聞いたことか！米国人選手への声援を遙かに上回る励ましを受けた大坂選手が目覚めるような弾丸サーブや切れ味鋭いショットを決めるたびに、自らを鼓舞するように「カモン」と声を発していたことが彼女のテニスの力強い再生を物語っているように受け止めました。



大坂選手

大金星狙いの相手の積極性と調子が上回ったため、実に悔しい敗戦でした。でも、試合後、コートを後にした大坂選手の背中に寄せられた心温まる拍手と声援を目の当たりにするにつれ、来年の大会での大活躍が目に見えようでした。

4. 全豪オープンの雰囲気

初めて体験して印象的だったのは、全豪オープンのアットホームな雰囲気でした。真夏のメルボルンの灼熱の太陽を避けるため、試合の中には午後7時開始も少なからずあります。そうすると、深夜までもつれこむ試合も。いきおい会場付近には、一日中お祭りのような華やいだ活気が漲ることになります。

また、会場内には、豪州を代表する南オーストラリアの高級ワインメーカー「ペンフォールズ」経営のレストランが併設されています。そこで食事と極上のワインを楽しんでからテニス観戦に臨むとの、なんとも贅沢な風習が根付いているところに、テニス王国の伝統の深さと奥行きを感じました。



全豪オープンの会場となっているメルボルンパーク（出典：ビクトリア州政府 HP）
（右奥がメインコートのロッド・レーバー・アリーナ）

5. 若いアスリートから得られるインスピレーション

東大大学院で講師を務めていた時、「今の日本の若者は消極的で、海外留学を敬遠する。」という批判をしばしば聞かされてきました。確かに日本から海外へ赴く留学生は減ってきました。ひとつには、費用対効果の問題が意識されていることは間違いありません。世代論を云々する人もいます。

しかし、スポーツの世界を見るとどうでしょうか。少しでも上の世界を目指すアスリー

トが果敢に世界にチャレンジしてきているのではないのでしょうか。テニスの大坂なおみ、野球の大谷翔平、ゴルフの松山秀樹、サッカーの南野拓実等々。

臆することなく海外に挑み赫々たる戦果をあげてきている若手アスリートを見ると、世代を超えてアピールする強力なインスピレーションを感じます。むろん畑は違い、外交の任にある者として海外に出るのは当たり前なのですが、「打って出る」ことの重要性を改めて植え付けてくれる、そうしたスポーツ選手の活躍に心からの敬意と感謝を表したいと思います。

大坂選手、ありがとう。来年も待っています！

山上信吾